

ティリーヨ役だから、『トリコロールに燃えて』や『ボルベール<帰郷>』以上に若く華や
いだしかも知的な雰囲気までペネロペ・クルスが登場。美しさに一層磨きがかかったこの役
で、彼女がロサンゼルス映画批評家協会賞助演女優賞を受賞し、サテライト賞助演女優賞
にノミネートされたのは当然。そんな彼女の恋のお相手が同年輩の男ではなく、大きく年
の離れた大学教授デヴィッド・ケペシュ(ベン・キングズレー)となったのは、一体なぜ？
まずは、そんなペネロペ・クルスに注目してこの映画に興味を・・・。

ベン・キングズレーの見事な演技力もタップリと

他方、私のように美人女優目当てではなく、純粋に芸術として映画を鑑賞しようとして
いる映画評論家たちが注目するのは、デヴィッドを演ずる1943年イギリス生まれのベ
テラン俳優ベン・キングズレー。アカデミー賞などを受賞した『ガンジー』(82年)を代
表作とするベン・キングズレーを私が観たのは、『砂と霧の家』(03年)『英雄の条件』(0
0年)『オリバー・ツイスト』(05年)などだが、その演技力は折り紙付き。

映画冒頭に登場するテレビのインタビュー番組における自信に満ち溢れた語り口と、「ア
メリカの快樂主義の原点」というきわどいテーマの本を書き、私生活においても自由奔放
な生活を楽しんでいるデヴィッドは、私の目から見てもかなり魅力的な男。もちろん、同
年代好みの女の子には恋愛の相手としては対象外だろうが、コンスエラのように美しいだ
けではなく知的な女子学生にとって、こんな教授は恋愛対象としてもオーケー・・・？そ
んな期待を持ちながらパーティーの席で、デヴィッドがコンスエラに声をかけたのはミエ
ミエ・・・。

男にとってこんな生き方は理想的？

マイホーム至上主義の男を否定するつもりはないが、私にとってはさまざまな社会的役
割を担っている男の方が面白いし、私もそうありたいと願っている。そんな男にとっては
社会的活動と家庭をうまく両立できないケースが多いようで、私を含め私の周りの男たち
は離婚経験者いわゆるバツイチが多い。もちろん(?)デヴィッドもそう。デヴィッドは
若い頃にした結婚を人生最大の失敗だったと公言し、今は自由な恋愛を謳歌していた。

彼の15年来のいわゆるエッチ友達、すなわち肉体関係だけで繋がっている便利な女が
キャロライン(パトリシア・クラークソン)だが、それは一方的なものではなく、キャロ
ラインにとってもデヴィッドは便利な男。男と女は肉体関係が生じると、やれ結婚しろと
か、金をくれ、モノを買ってくれ等のややこしい関係が生じがちだが、大人同士のエッチ
友達と割り切っているデヴィッドとキャロラインの間にはそういう問題は一切ないようだ。
いるいる、私の周りにもこういう男や女が・・・。

もっとも、いくら恋愛は自由だと言っても、「職場の部下には手を出すな」と同様、「教え子には手を出すな」が鉄則だが、デヴィッドはそんな鉄則すら平気で破る無軌道ぶり。コンスエラは利口な女だから、関係が悪くなってもやれセクハラだ、やれパワハラだと訴えられる恐れはないと見切っているのだろうが、その判断は意外と難しいもの。こんなデヴィッドの生き方は、男にとってある意味理想的・・・？

この質問と答えはどうも・・・

週刊ポストの09年1月2・9日新年合併特大号で見た秋吉久美子のセミヌード姿にはビックリしたが、『赤ちょうちん』(74年)、『妹』(74年)等における彼女の脱ぎっぷりは見事だった。また、『化身』(86年)でデビューした黒木瞳だって小ぶりな乳房をすべて見せたヌードシーンは圧巻だった。ところが、最近の日本の若手女優陣は、出し惜しみ気味、脱ぎ惜しみ気味・・・？

しかし、スペインを代表する国際的美人女優ペネロペ・クルスには出し惜しみ、脱ぎ惜しみは全くなく、デヴィッドとの初デート即ベッドインのシーンでは、美しいヌードとりわけ豊かな乳房を惜しげもなく堂々と披露。プレイボーイのデヴィッドには、きっと女性との肉体関係は1度だけが原則だろうが、コンスエラとの肉体関係がその例外としてその後もずっと続いたのは、やはりその魅力のせい。しかし、ここでいけないのは、「女性関係は多い方？」という無邪気なコンスエラの質問に「50人以上・・・」と答えたデヴィッドが、コンスエラに対して「君はどうなんだ？」と尋ね返すこと。男は単純だからそんな質問に対して正直に答えるが、女はそんな質問に正直に答えない動物であることは、プレイボーイならわかっているはずでは？さて、それに対するコンスエラの答えは「5人」だったが、それはホント？そして、この質問とこの回答がデヴィッドに対して以降どんな影響を・・・？

男同士にはこんな友人関係も

最近の若者たちは友人に対しても自分のことを露骨に説明しないかわりに、友人の生き方にも深く介入しないという比較的距離感の遠い友人関係が多い。しかし、この映画におけるデヴィッドと詩人のジョージ・オハーン(デニス・ホッパー)との友人関係を見ると、本来秘め事であるはずの女性関係についてもすべてオープン。もっとも、女同士のきわどい会話になると男同士以上に生々しいらしい・・・？しかしてそこらあたりのアヤは、『死ぬまでにしたい10のこと』(03年)などの恋愛映画をつくり国際的にも高く評価されている、1960年生まれ的女性監督イサベル・コイシェの手にかかるとお手のもの・・・。

プレイボーイという意味ではジョージもデヴィッドと同じようなものだが、ジョージが

デヴィッドと違うのは家庭は家庭としてきちんと守り、女遊びは女遊びと割り切っていること。もちろん、デヴィッドだってこの年になって、今さら若い女との恋にのめり込んだうえ、彼女の過去の男に嫉妬の炎を燃やすなんてことはありえないはずだが、現実？

こんな年になって、こんなふうにな女の悩みを何でも話せる友人の存在は貴重。しかし、ジョージの忠告にもかかわらずデヴィッドはコンスエラとの純愛(?)にひたすらつき進み、コンスエラもそれに対応する愛情を示していたが、そんな2人に生じた行き違いとは？

ここが、いい加減な男と真面目な女の違い？

いくらコンスエラを愛していると言っても、デヴィッドはキャロラインとの関係は平行して続けていたから、男はやっぱりいい加減な動物？それに対して、女はデヴィッドを愛すれば愛するほど2人だけの関係ではなくきちんと周りに認めてもらえる関係にしたい動物？

コンスエラが大学卒業を機会にデヴィッドをきちんと両親に紹介したい、両親が主催する卒業記念パーティーに必ず出席してほしいと申し出たのは、きっとそんな気持ちによるもの。異例の真剣な申し出にデヴィッドはオーケーしたが、内心これはうとううしいことになったなと思ったよう。だって正式に両親に紹介されたら、今後の交際についてあれこれ指図されたり、場合によっては結婚を迫られたり？そこまで深く考えたかどうかは知らないが、コンスエラの家に向かっている途中で急に「車がエンストした」など見え透いた嘘について引き返してしまうとは、何たる体たらく。こんなデヴィッドの態度にコンスエラが失望したのは当然だが、これによってデヴィッドとコンスエラの交際が完全に断たれてしまうとは、デヴィッドもさすがに予想できなかったよう。要するに、それほど深くコンスエラの心は傷ついたということだ。

コンスエラからかかってきた電話にデヴィッドは出られなかったが、その留守電には「あなたは私にとってすべてなのに、来なかった。愛していたのに！」という三くだり半的通告が。あくまで誠実かつ前向きにデヴィッドとの関係を処理しようと考えたコンスエラには、いかにも中途半端であいまいなデヴィッド流交際の仕方は理解できなかったわけだ。これは、デヴィッドとコンスエラとの関係を知り、一時的に怒ったキャロラインが、結局デヴィッドとのエッチ友達としての関係が以降も続いたのと好対照。やっぱりここが、いい加減な男と真面目な女との違い・・・。

オヤジと違って息子は？

12月27日に観たりチャード・ギアとダイアン・レインが共演した『最後の初恋』(08年)ははっきり言って出来が悪かったが、同じ医者でもオヤジとは全く価値観が違う息

子が登場し面白い味つけを与えていた。それと同じように『エレジー』でも、オヤジと同じ医者になっているデヴィッドの息子ケニー・ケベシュ（ピーター・サースガード）が登場し、プレイボーイのオヤジとは全く異なる悩みを持ち出すところが面白い。つまり、ケニーも妻と離婚しようかと迷っているのだが、子供たちのことを考えるとオヤジと同じように簡単に離婚することができず、悩んでいるわけだ。

そんな大人としての悩みをはじめて父親に相談したケニーだったが、それに対するデヴィッドの対応ははっきり言って父親失格。私なら、自分の息子がそんな相談にくれればもっと親身になって……。イサベル・コイシェ監督が、映画後半にそんな息子ケニーとデヴィッドとの父VS息子のエピソードを入れたのはなぜ？それは、その後乳ガンになったコンスエラが、なぜか再びデヴィッドを訪れてきたことに結びつける伏線も兼ねているのだが……。

ラストに向けて意外な展開が……

松雪泰子主演の『余命』（08年）は、待望の妊娠判明直後に乳ガンの再発を知ったヒロインが乳ガンの治療のために出産を諦めるべきか、それとも子供を産むために乳ガンを放置すべきかと悩む姿を描いたものだが、デヴィッドとコンスエラのラブストーリーをここまで描いてきた『エレジー』はラストに向けて、コンスエラの乳ガンという意外な展開になっていく。

プレスシートにはそこまで書かれていないのだが、私の評論としてはそこまで書かざるをえない。なるほど、あの豊満で美しいコンスエラの乳房を前半強調していたのは、こういう展開にするため。それはそれで理解できるのだが、きっぱりデヴィッドと別れていたコンスエラは今なぜそのことを告げるためにデヴィッドに電話し、デヴィッドの家を訪ねてきたの？「私には今あなたが必要なの」。たしかにコンスエラは電話でそう言ったが、その言葉の意味は？

さすがにこれ以上ネタバレにしてしまつては、あなたがこの映画を観る意欲が失われるかもしれないので、ここでやめておこう。『最後の初恋』では、リチャード・ギア扮する再出発した医師の死という意外な展開が待っていたが、それはどうもつくりすぎという感じ……。？しかるところ『エレジー』では、乳ガンが発症したコンスエラとそれを聞いたデヴィッドとの関係は新たにいかに展開していくの？それはあなた自身の目でしっかりと……。

2008（平成20）年12月30日記